

第十一問 次の文章を読んで、後の問に答えよ。

- ① 「日本文化」と「西洋文化」の関係に関わる問題を「異文化問題」として考え、「日本文化とは何か」という問題を、そういう中で文化的アイデンティティがいかに構築されたかという形で捉えようとするような研究は今、急速に盛んになってきている。その際に引き合いに出されるのが、エドワード・W・サイードの「オリエンタリズム」をめぐる議論である。われわれが日本の固有の文化だと思いきんできたようなものが、実は西洋の側の自己中心主義的な歪んだ自己認識の産物であり、自らが最も進んだAな文化をもっていることを自認する西洋によって、自己のうちから追い払われた非合理的なものが「エキゾテック」なものととして表象されているにすぎないこと、そして他ならぬ日本人自体が、こうした西洋人の視線を内面化させてしまっており、甲を自らの固有の文化と錯覚してしまっているというような議論は、「文化」を論じようとする際には、今ではほとんど共通了解事項になっていると言っても カゴンではないであろう。
- ② 西洋の「異文化」認識のもつ問題をもっとも端的に浮き彫りにさせる事例となったのは、一九八四年にニューヨークの近代美術館で開かれた「二〇世紀美術におけるプリミティヴィズム」展と題された展覧会をめぐって起こった事件であった。この展覧会はピカソ、マティスといった今世紀初頭の画家たちの活動にスポットをあて、彼らの活動とアフリカ美術との親縁性を浮き彫りにしようとする ヤシンのものであったが、そこでの アフ

〔出典〕

渡辺 裕

『日本文化』

モダン・ラフソディ

〔著者出題歴〕

・センター試験
・京都大学
・大阪教育大学
・富山大学
・愛媛大学
・亜細亜大学
・中央大学
・早稲田大学
・龍谷大学
・京都産業大学

第十一問

- リカ美術の取り扱い方をめぐって大変な議論がたたかわれることになったのであった。美術館や博物館という制度にひそむイデオロギーや文化に向けるわれわれのまなざし自体の孕む問題点等々、きわめて タキにわたる論点を含み、とりわけ文化人類学の領域では、その学問の歴史や方法論自体を問題にする Bな議論に発展することになった。
- ③ この展覧会では、ピカソ、マティスなど、約一五〇点の「モダンアート」の作品と、それに直接間接に影響を与えたり、あるいは並行関係をもつという形で 対応するとされたアフリカを中心とする「部族美術」約二〇〇点が集められ、並べて展示された。企画者の意図では、両者がいかに似ているかということを示すことによって、今世紀のモダンアートの歴史を「部族的」なるものとの親縁性の発見の歴史として描き出し、そのことを通して、二〇世紀の西洋がアフリカを発見することによっていかにして自文化中心主義をのりこえて文化の新しい局面を開こうとしたかが明らかにするはずであった。 しかし、そうはならなかった。この企画には批判が相次いだのである。
- ④ その批判の急先鋒の一人にジェームズ・クリフォードがいた。クリフォードは、ここで発見されたと称される親縁性なるものが、まさに西洋の側から、西洋中心主義的な視点を通してみた全く架空のものにすぎず、その視点の中に宿されている西洋による搾取や略奪・収集の歴史を隠蔽するものにほかならないとして厳しく批判した。
- ⑤ この展示で Cなのは、モダンアートの作品が現実の歴史的コンテクストの中にある生きた存在として取り扱われているのに対し、アフリカ美術の方は制作年代も作者も、

課題

108

51

10

問五 傍線部2「アフリカ美術の取り扱い方」とあるが、筆者によれば「ジェームズ・クリフォード」は「アフリカ美術」の近代における動向をどのように捉えているか。それを表す二十文字以上四十文字以内の箇所を抜き出し、冒頭と末尾の二字をそれぞれ記せ。

--	--	--	--	--

問六 本文の内容に合致するものを、次の中から二つ選べ。

- イ 一九八四年にサイドが企画した展覧会に対し、クリフォードはそこに見出される日本人像が、西洋の歪んだ自己認識から生み出されたものであることを指摘した。
- ロ クリフォードは、西洋がアフリカ文化を自分勝手な仕方では捉えているばかりか、そうした西洋中心主義的な自らのありように無自覚でもあることを厳しく批判した。
- ハ グリフォードによれば、ピカソなどの「モダンアート」とアフリカの「部族美術」に親縁性があるのは、アフリカ文化が先進国である西洋の文化を模倣してきたからである。
- ニ 「オリエンタリズム」をめぐるサイドの議論によれば、西洋は非西洋を遅れたものと見なしつつも、つねに「エキゾティク」なものとして神秘化し、崇敬の対象としてきた。
- ホ 西洋は自文化を進歩し続ける歴史的なものと捉えつつ、アフリカ文化を静止した非歴史的なものとして保護するという形で抑圧している、とクリフォードは主張した。

--	--	--

私と世界

第十二問 次の文章を読んで、後の問に答えよ。

① ひどく個人的な経験からはじめたい。六〇年代後半は、この国のいわゆる高度成長期である。私は、京浜工業地帯に隣接する、海と山に囲まれたちいさな町に住む小学生だった。ときおりはおとなに手をひかれ、東京にでかけたものだ。住んでいたのは街ともいえない街である。田園風景がむしろ身づくろいであった。終点に近づくにつれ、車窓をながれてゆく景色が典型的な工業都市の光景へと変わってゆく。河ぞいに工場が建ちならび、煙突からは煙がたなびき、空はどんより煤けている。

② この国は、絶え間なく成長してゆく。おとなたちはそう語り、私もたぶんそう信じていた。すくなくとも、街がマタタク間に（と、子どもにはおもわれた）変わっていったのはたしかである。都下の親戚の家にいくと、いつのまにか近所からはトロリーバスが消え、やがて路面電車のすがたも見えなくなる。なにより、電車から見える風景が変貌した。工業地帯は、子どもの目にもあきらかにA 密集し、また絶えず拡大してゆくかに見えた。

B 感じた悲しみは、やはりそれなりのものであったにちがいない。つまり、子どもなりの感情だつたに相違ない。だが、悲哀を感じたという事実には、おそらく記憶がいはないような気がする。路面電車がハイシされ、田圃が消えてゆくこと自体が哀しかっただけではない。工業地帯の付まいそのものが、どこかもの悲しかったのである。

〔出典〕

熊野純彦

『レヴィナス入門』

〔著者出題歴〕

- ・ お茶の水女子大学
- ・ 静岡大学
- ・ 広島大学
- ・ 法政大学
- ・ 早稲田大学
- ・ 関西学院大学
- ・ 近畿大学
- ・ 西南学院大学